第７章　宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

調査地区は医学部および附属病院棟と北西―南東に走る市道を隔てた大学キャンパスの東端部に位置する（Fig.64，66　PL.49）。本地区での体育館新営に伴い、昭和59年２月２日から16日にかけて、土層の堆積状況、並びに遺構、遺物の有無の把握を主眼とした試掘調査を人文学部考古学研究室の協力を得て実施した。

調査は新営予定地約1100㎡のうち約260㎡について学生部室棟のある東半中央部を回避し、東西および南北に幅３ｍ、長さそれぞれ26ｍ（TR１）、17ｍ（TR３）および18ｍ（TR２）、25ｍ（TR４）のトレンチを２カ所ずつ合計４カ所設定して行なった。（Fig.65　PL. 50，51，52）。なお、腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土は機械を使用して除去し、それ以下は人力による分層発掘を行なった。

その結果、顕著な遺構は検出されなかったものの、石器、土師器、須恵器、瓦質土器および磁器が出土した。

２　位置と環境

宇部市域の地勢および遺跡立地、分布のあり方は第５章で概括的に述べた。従って本稿では医学部キャンパス周辺地域についてやや詳細にみていくことにする。

医学部キャンパスは宇部市街地の北辺に位置し、埋積谷や小盆地を開析しつつ南流する真締川中流の右岸、工学部キャンパスの西約２㎞に所在する。真締川の浸食によってその流路付近には本キャンパスの立地同様小規模な沖積低地が形成されており、現在知られている遺跡はこ

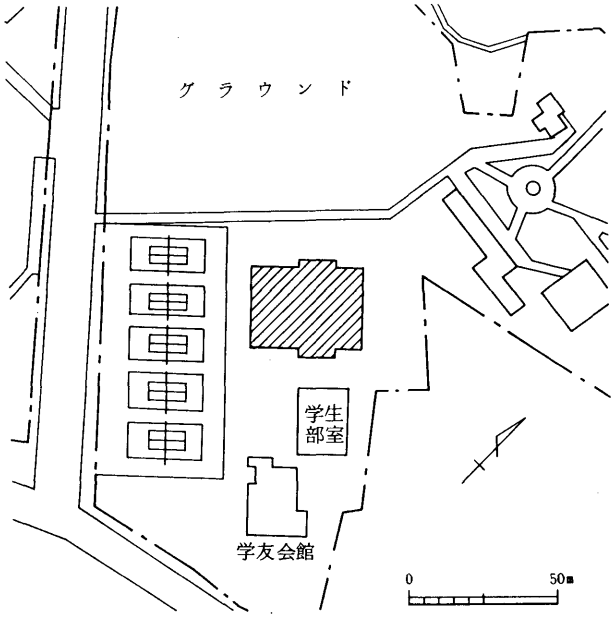


Fig.64　調査区位置図（１）

うした埋積谷、小盆地および狭隘な沖積低地を臨む段丘上、低丘陵上に所在する。

真締川上流域では北迫遺跡[1]、南方遺跡等弥生時代の遺跡が確認されている。中期後半の北迫遺跡は鹹水性のカキ、ハマグリ、ウミニナ等を主体とした貝塚を伴っており、同遺跡以南の真締川上流域標高10ｍ弱の沖積低地は往時には浅海性の入江であった可能性を示唆している。

古墳時代の遺跡はキャンパス北部に隣接する。北東から南西に延びる低丘陵先端部付近には４基の箱式石棺が検出された尾崎古墳が所在し、うち１基からは１本分の人骨と共に鉄剣１、鉄鏃２が出土している。また、同一丘陵上、同古墳の奥部には地下式横穴が存在したといわれる小串古墳がある。

川津遺跡[2]は標高10ｍ前後の段丘上に位置し、旧石器時代から中世にかけての遺物[3]が出土している。遺跡周辺には厚東氏三代武通[4]の創建による川津寺が存在したといわれ、七代武光は琴崎八幡宮の神宮寺として尊拝したという。

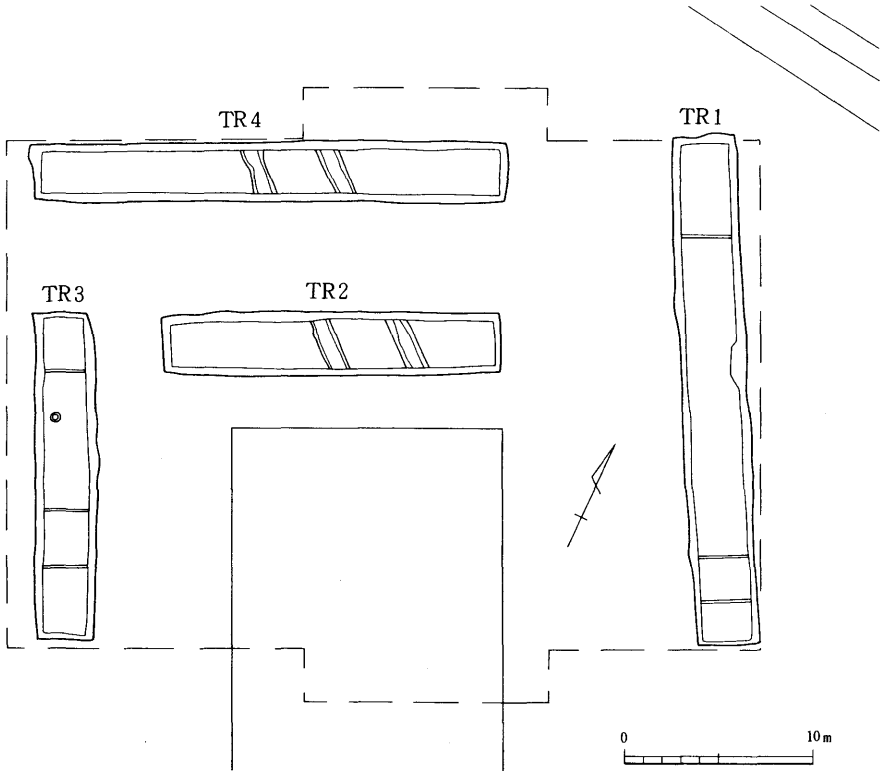


Fig.65　トレンチ配置図

宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査

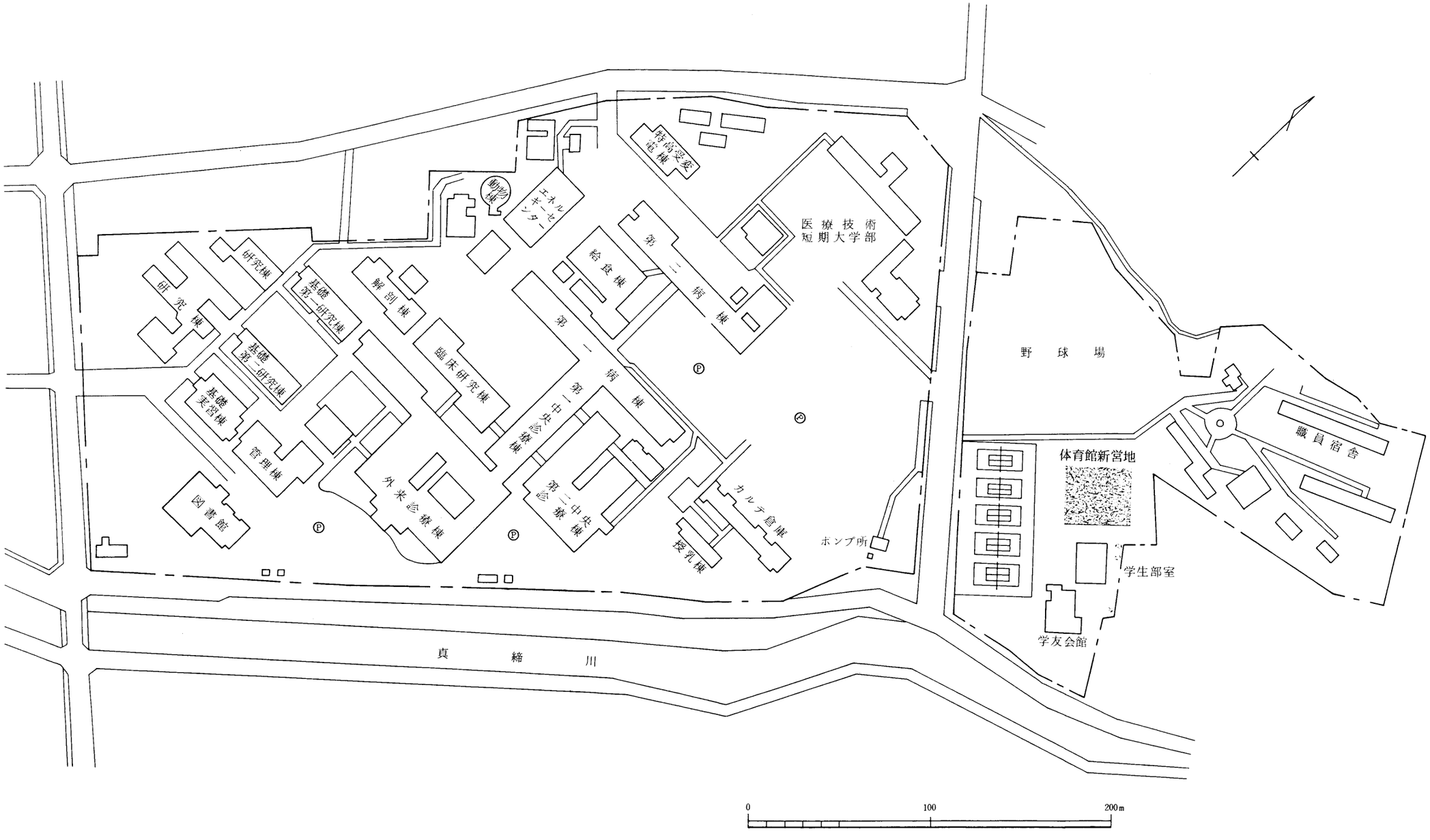


Fig.66　調査区位置図（2）

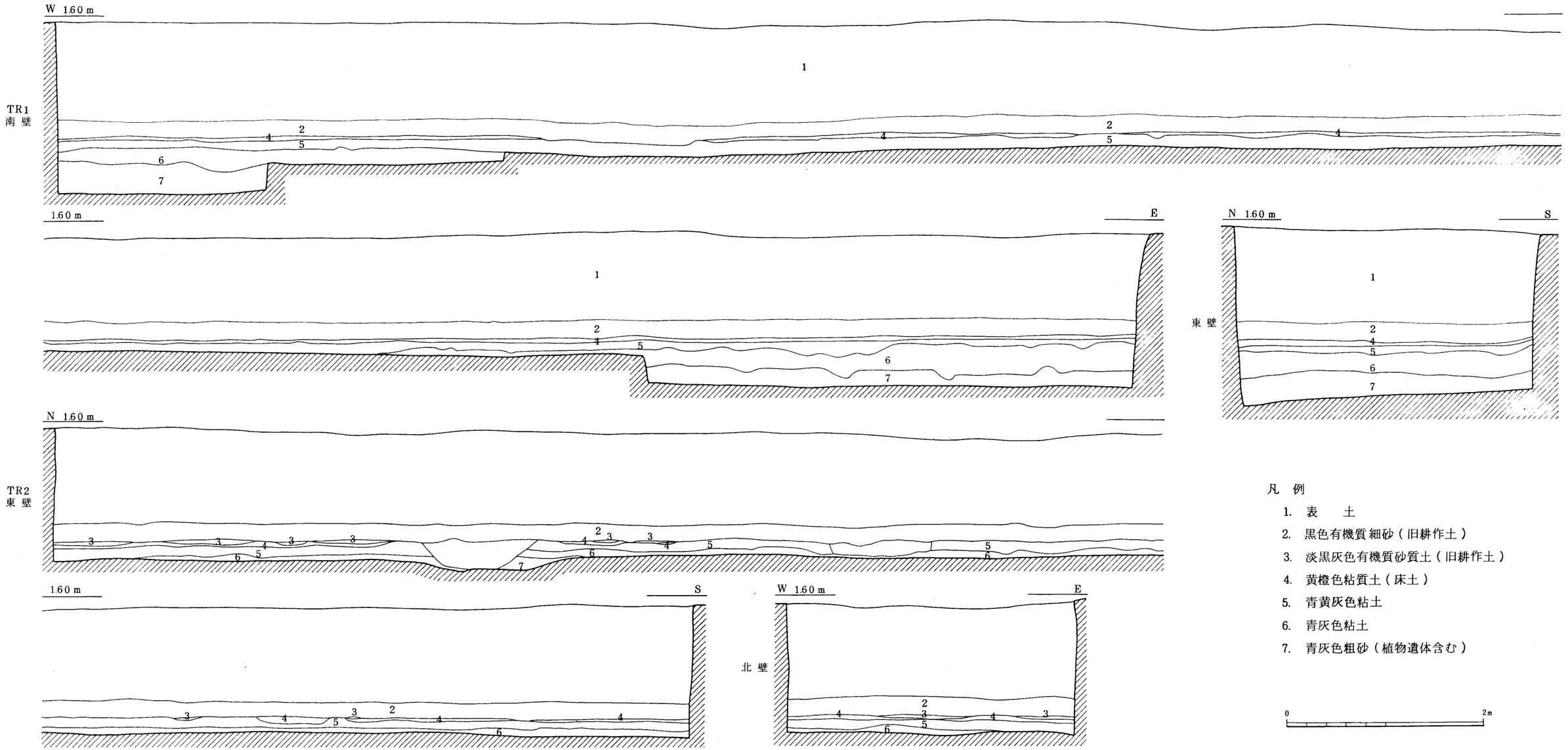


Fig.67 土層断面図（1）

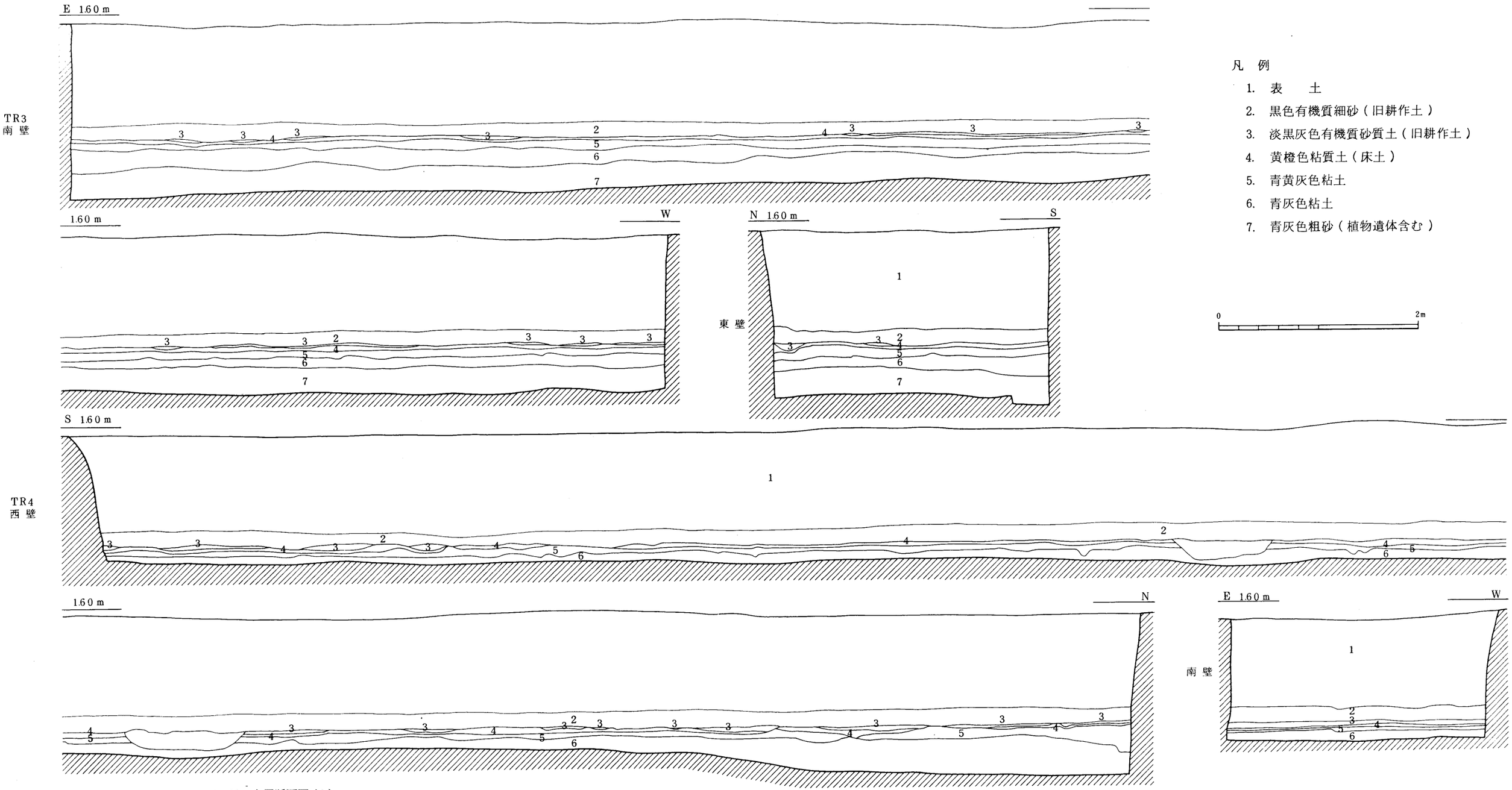


Fig.68 土層断面図（2）

3　層位

調査区内において観察した堆積層は７層に分層されるが、第７層中において激しい湧水をみたため地山面の確認には至っていない。（Fig. 67, 68）。

第１層は厚さ90～100cmの腐蝕土および構内造成時の置土を含む表土で中位以下は標高０ｍ以下である。第２層：黒色有機質細砂土および第３層：淡黒灰色有機質砂質土は二時期にわたる旧耕土と思われるが、第３層は部分的に残存するにすぎない。第４層：黄橙色粘質土は床土。第５層：青黄灰色粘土以下は第６層：青灰色粘土・第７層：植物遺体を含む青灰色粗砂と続く非人為的な二次堆積層である。なお、第７層は湧水のため完掘せず、TR１、TR３において部分的に掘り下げた。

TR３東部、第５層上面において3.5cm×4.5cm、深さ13cmの不整形ピットを検出したが遺構か否か判然としない。

また、TR２およびTR４において第２層を掘り込む２条の溝が検出された。いずれも南東―北西方向に約2.7ｍの間隔をおいて併走するもので、南側の溝が幅90～110cm、深さ10～14cm、北側が幅100～110cm、深さ15～23cmの規模をもち、溝底は南東から北西へ下降している。近代から現代にかけてのもので、真締川から分流する小河川である可能性が強い。

遺物は第２層および第４～６層において出土した。

4　遺物

出土遺物には旧石器時代のナイフ形石器、削器、剥片、細石核、古墳時代の須恵器甕および室町時代の土師器坏、土師質の鍋、擂鉢、鼎、瓦質の鍋、擂鉢、壷がある。

石器（Fig.69　PL.53）

ナイフ形石器(1)　横長剥片を素材とし切出状を呈する。先端部欠損。左右両側縁下端および基部に自然面を残し、ブランティングは素材の形状を生かし左側縁部にのみ弱く施される。内彎ぎみの刃部は長刃で使用痕を思わせる剥離痕が全縁に認められる。最大器長38.0mm、最大器幅23.5mm、最大器厚12.0mm、刃部長26.5mm、刃部角度65.5度。重量 8.9ｇ。チャート製。２層出土。

削器(2)　不定形の横長刃器状剥片を素材とした小形の削器であろう。左側縁を刃部とするが、調整はやや粗雑である。下端部に自然面を残す。最大器長21.0mm、最大器幅29.5mm、最大器厚9.0mm。重量 3.4ｇ。チャート製。６層出土。

剥片(3)　やや厚手の剥片で上下両端に自然面を残す。裏面には顕著なネガティブバルブが認められる。使用痕はみられない。最大長44.0㎜、最大幅22.5㎜、最大厚12.0㎜。重量8.4ｇ。チャート製。４層出土。

細石核（４・５）　４は小円礫を素材とした細石核で作業面は正面および裏面の一部に限定されている。打面調整作業は行なわれず、自然面を打面とする。高さ12.5㎜、幅22.0㎜、厚さ15.0㎜、作業面積18.0㎜。重量 5.1ｇ。チャート製。４層出土。５も小円礫を素材としている。打面は一方向からの剥離によって造出されている単設打面で、顕著な打面調整作業はなされていない。剥片剥離は裏面を除いて急角度になされており、角錘状の最終形を呈する。高さ19.0㎜、幅23.0㎜、厚さ15.0㎜。重量 5.0ｇ。チャート製。２層出土。

土器（Fig.70　PL.54）

土師器（１～４・11・12）　１～５は４層、６～14は５層出土。１は皿の底部で糸切り底。器面風化著しく調整不明。赤橙色を呈し、胎土精良、焼成堅緻。２・３は土師質の鍋ないしは鼎の口縁部。体部上半で内彎ぎみに屈曲した口縁端部は内側に肥厚する。２は内面屈曲部下半は刷毛目、他は横ナデ調整。赤橙色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。３は内外面とも刷毛目調整で外面は丁寧。口唇部は横ナデ。外面黒色、内面灰褐色を呈し、胎

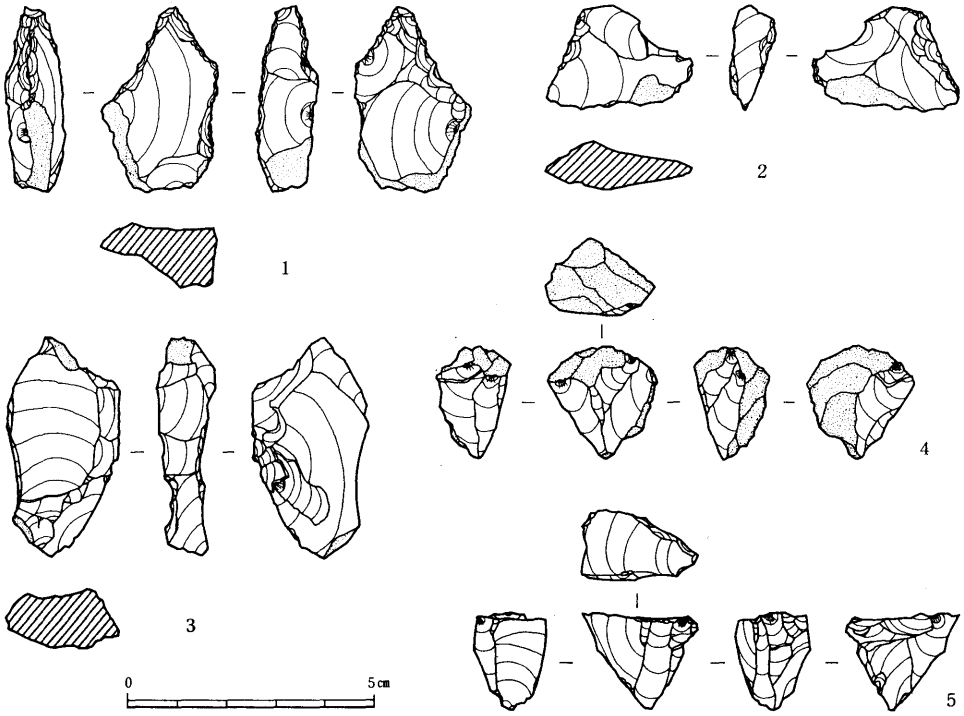


Fig.69　出土遺物（１）

土、焼成とも良好。４は土師質の擂鉢の胴部で、内面７条単位の櫛目描き仕上げがみられる。刷毛目仕上げで赤橙色を呈し、胎土やや不良、焼成堅緻。11・12は土師質の鼎の脚部で指圧による整形を施す。11は脚端部を屈曲させる。橙灰色を呈し、胎土やや不良、焼成良好。12は橙褐色で胎土不良、焼成良好。

瓦質土器（５・６～８）　５は注口部をもつ擂鉢の口縁部で、口唇部を内面に肥厚させる。内面刷毛目、他は横ナデ仕上げ。暗黒灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。６は甕の口縁部。頸部から「く」の字に外反する口縁部は玉縁状に肥厚する。横ナデ仕上げで灰黒色を呈し、胎土やや不良、焼成堅緻。７は鍋ないしは鼎の口縁部。外面に煤付着。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。８は擂鉢の底部で内面６条の櫛目描き上げを施す。ナデ仕上げ。外面灰白色、内面乳白色で胎土精良、焼成堅緻。

須恵器(9)　甕の胴部で内外面ともナデ仕上げ、外面灰白色、内面暗青灰色。胎土良好、焼成堅緻。

磁器(10)　ゆるやかに外反する口縁部をもつ白磁の埦。釉は灰白色、素地は淡灰白色で施釉は薄い。

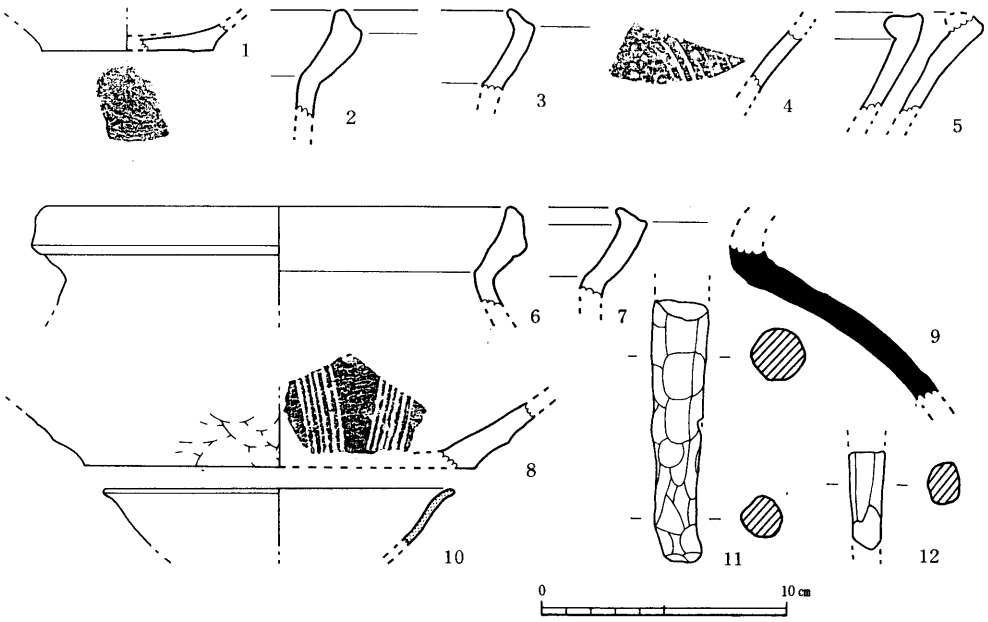


Fig.70　出土遺物（２）

5　小結

今回の調査では顕著な遺構は検出されなかったが、旧石器時代および室町時代後半の遺物が出土した。本稿では調査の成果を踏まえて今後に残された問題について若干の整理を行なうことにする。旧石器時代の遺物にはナイフ形石器、削器、剝片各１点、細石核２点があり、いずれもチャートを石材とする。一方、長桝遺跡、本郷遺跡、南方遺跡等宇部市域東部に密集する旧石器時代の各遺跡表採資料の器種構成は、ナイフ形石器、台形石器、台形様石器、掻器、削器、舟底形石器、細石器、細石刃等で石材は黒曜石、安山岩が圧倒的多数を占め、チャートは水晶と共にわずかに数点を数えるのみである。こうした表採資料の多寡、器種構成および特定石材の選択が各遺跡の性格、概念をパターン化するとすれば、遺跡規模を反映すると思われる表採資料数においてその占める各石器組成のあり方、特定原材の使用頻度からみて、とりわけ長桝遺跡におけるナイフ形石器の多さ、安山岩石材の選択は他遺跡とは明確な差異として抽出されるであろう。本調査における遺物は東部地域のこうした旧石器時代の諸遺跡とは異なり、削器を除いてすべて非人為的な二次堆積層中よりの出土であり遺跡の性格等については明確にし難い。しかし、キャンパス北部の尾崎古墳、小串古墳の所在する低丘陵がキャンパス中央部にまで延び[5]ていることは本調査区北東約1.2kmの真締川左岸、標高10ｍの中位段丘上に位置し掻器を出土した川津遺跡と同様の立地を示す旧石器時代の遺跡の存在を想定させる。

また、土器には土師器、瓦質土器、須恵器、磁器があり、須恵器を除いていずれも室町時代後半のものとみて大過ないものである。出土遺物はかなり磨滅しており、遺物を包含する堆積層はグライ化し不安定な状態であることから真締川に起因する堆積層として把握されるものであろう。その搬入経路についてはキャンパス内における今後の詳細な調査によって明らかになるものと思われ、現段階では川津寺の想定される川津遺跡および土師器が出土したといわれる西の宮遺跡等本調査区と近接する真締川中流域の諸遺跡の所在を指摘するにとどめておく。

（河　村）

〔注〕

1）以下、特に明記しない限り遺跡の概要、出土遺物については下記の資料に起拠する。
　山田亀之介　『宇部郷土史話』（宇部郷土文化会、1955年）。
　宇部市史編纂委員会　『宇部市史　資料篇』（1966年）。
　宇部市教育委員会　『宇部の遺跡』（1968年）。

2）宇部市教育委員会上野百合人氏に御教示頂いた。

3）妙青寺本、毛利家文庫本および恒石八幡宮、浄名寺に伝えられる系図、系譜にみえる。

4）防長風土注進案　舟木宰判に「厚東武光公方宇部川津村二有之候川津寺を神宮寺として御崇敬有候」とある。

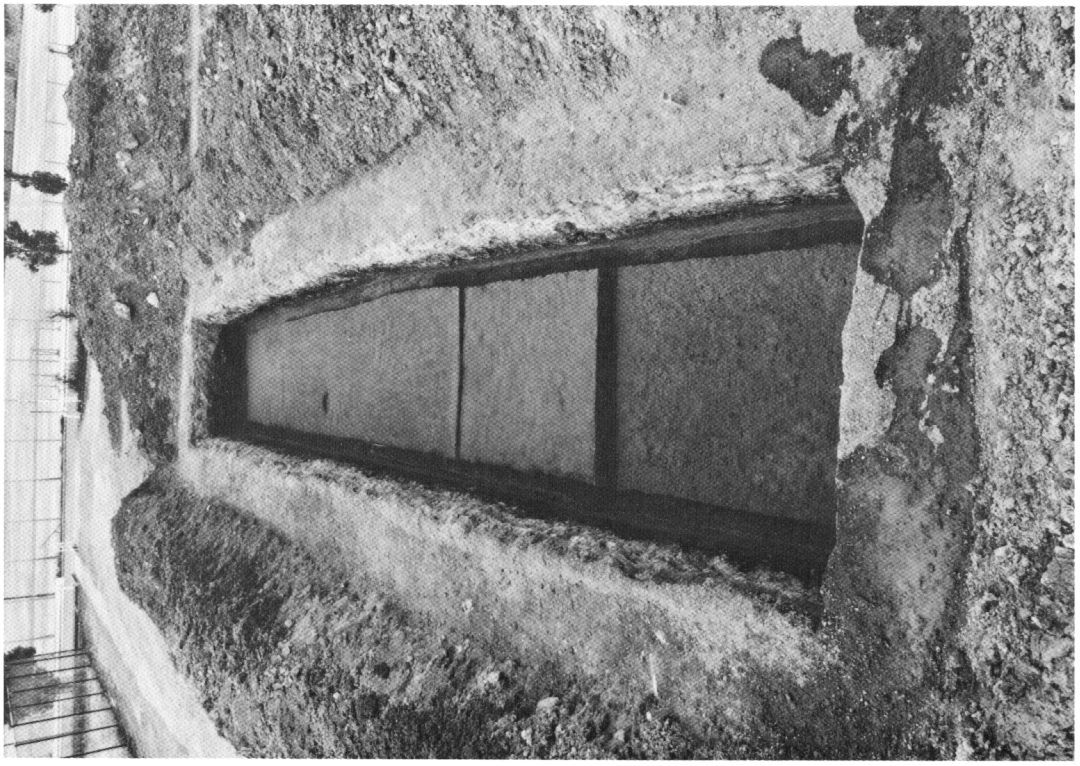
5）宇部セントラルコンサルタント「山口大学医学部専修学校新営地質調査報告書」（1978年）。

小串構内医学部体育館に伴う試掘調査(1)

(1) TR1全景（南東から）

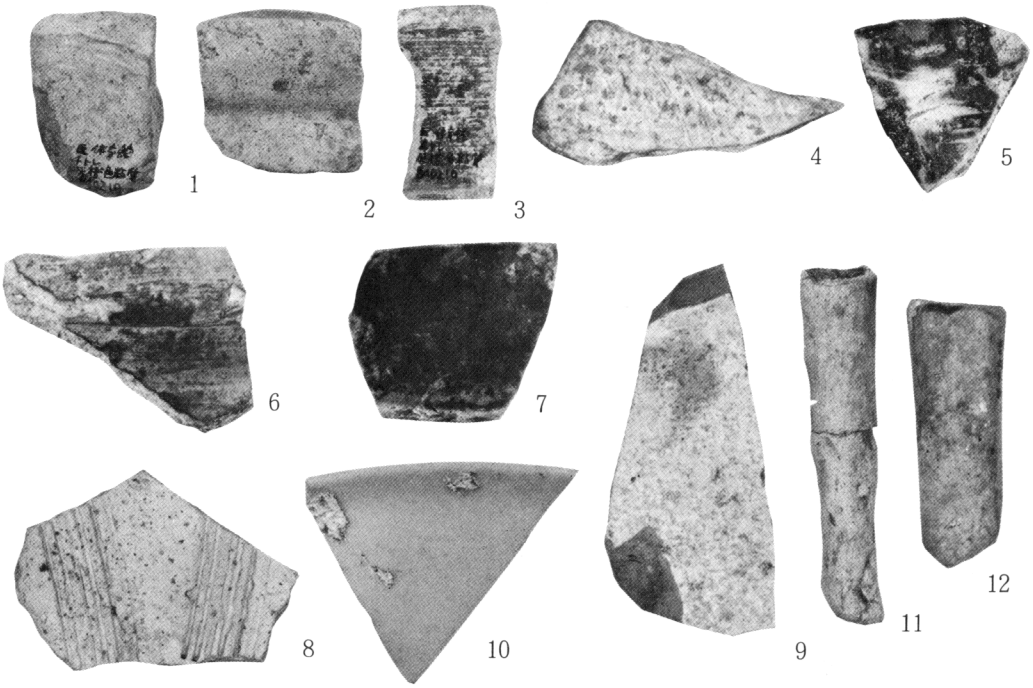
(2) TR2全景（北東から）

(1)　TR 2 中央部土層断面（北西から）

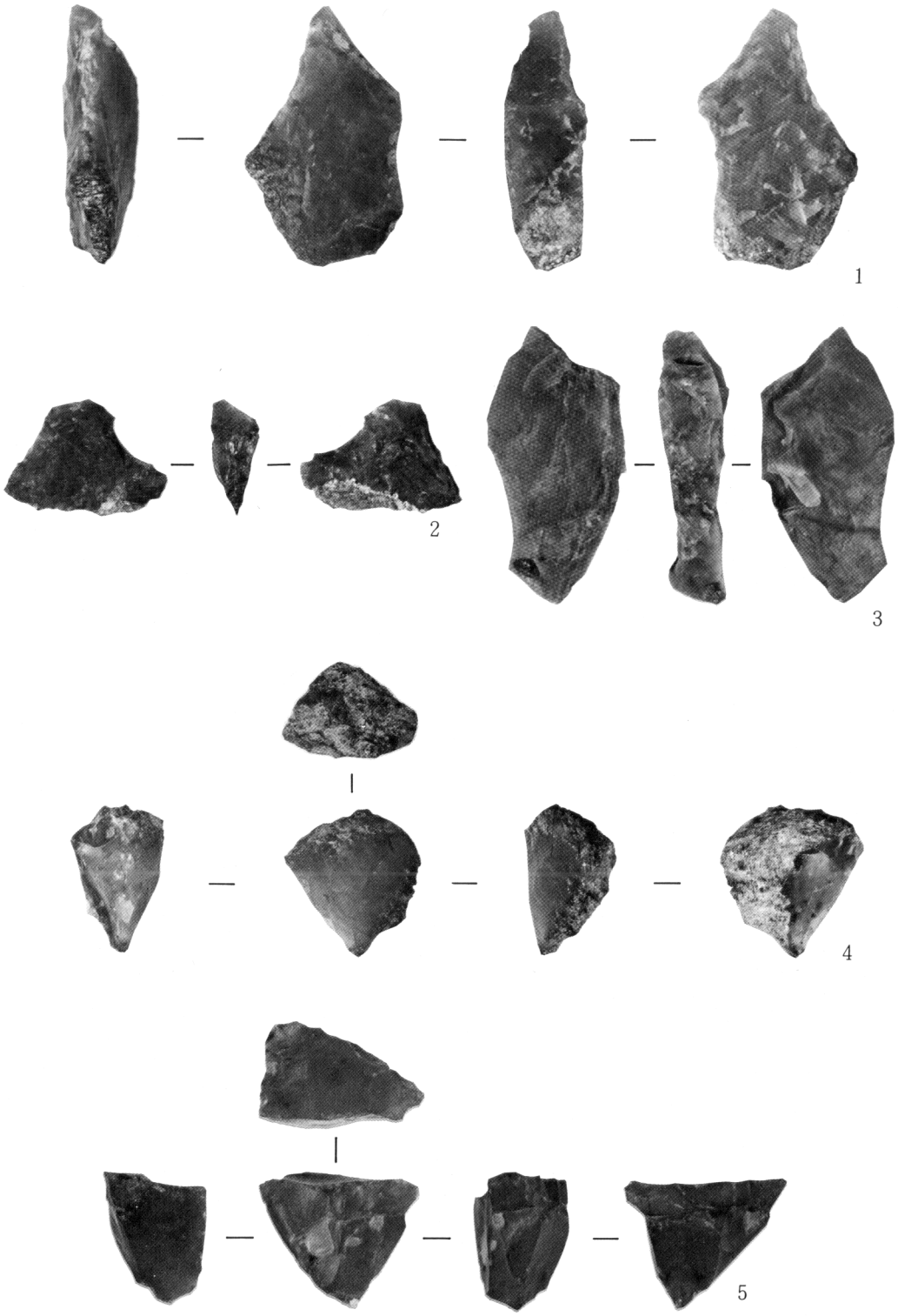


(2)　TR 3 全景（南東から）

(1)　TR4全景（北東から）



(2)　出土遺物



出土遺物